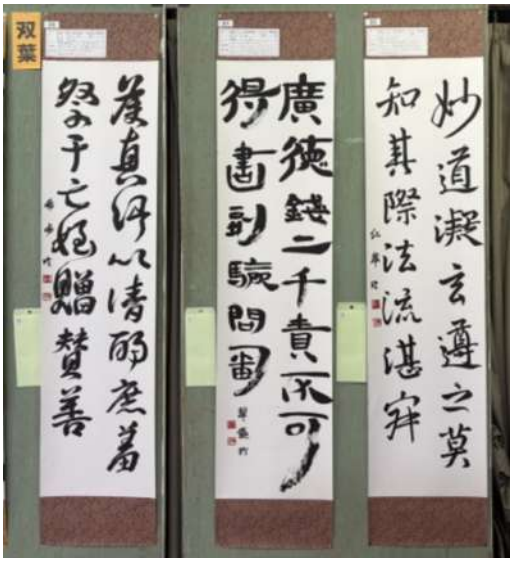
学道一如

発行
小樽双葉高校
新聞部
2026年9月25日
第33号

書道部3名が全道へ
多々見さん、村上さん特選、原さん入選

第60回高文連後志支部書道展に3名が出品し、多々見希歩さん、村上仁皐さんが特選、原翠優さんが入選に選ばれ、全道大会への出場を決めた。

原 翠優・多々見希歩・村上仁皐



【写真右の作品から】

王義之を研究

村上仁皐さん（2年1組）

「集王聖教序、王義之の文字を集めて作られた石碑の文字の臨書です。全体的に細めの文字ですが、弱くならないように気をつけました。」

木簡を自分らしく

原　翠優さん（2年3組）

「木簡の柔らかい質感を出しつつ、リズムにのり自分らしく書くことにもこだわりました。」

はらいで悲しみを表現

多々見希歩さん（3年4組）

「祭姪稿、兄弟が死んだ悲しみをはらいで表現しています。線のメリハリに気をつけました。」

写真部
竹山心晴くんが優秀賞
佐藤優羽さんが入選

9月11日に開催された高文連後志支部写真展で竹山心晴くん（3年4組）の「父の職業」が優秀賞、佐藤優羽さん（3年4組）の「with friend」が入選し、全道大会に作品を出品する。他に4作品が佳作を受賞した。全道大会後に作品を紹介する。

バドミントン女子ダブルス
尾山・米澤組が支部準優勝

後志支部新人戦バドミントン大会が9月12、13日、余市町で開催され、女子ダブルスの尾山葵衣（2-3）、米澤芽唯（2-2）組が準優勝、男子シングルス2部で山本琥珀（2-1）が3位に入賞した。

新人戦に向けて頑張る

尾山葵衣さん

前大会でシングルス・ダブルス共に優勝していた尾山さんはプレッシャーを感じていた。1日目のダブルスの結果をひきずり、2日目のシングルスは練習の成果を出せず、不完全燃焼に終わった。11月の新人戦に向けては気持ちを切り換え、練習に励むという。

自分たちのプレーを

米澤芽唯さん

「連覇したかった」が相手（寿都高校）も夏休み中に強くなっていた。相手の繋いで確実に入れるプレイに集中力が切れ、普段出来ていたことができなくなっていた。新人戦までに自分たちのプレイスタイルをもう一度取り戻す覚悟だ。

更に上を目指す

山本琥珀くん

2部で3位に入賞するまでに5試合、4回勝利し、潮陵の選手に敗れた。今大会で練習の成果を出せたと思うが、更に上のレベルの人に勝てるように練習量を増やし、精神力強化に努めたいという。

米澤さん、尾山さん、山本くん

支部美術展
黒島さんが全道推薦

高文連後志支部美術展が開催され、黒島那月さん（2-1）の「孤独」が全道推薦、花立知世子さん（3-3）の「中らぬ的をねらって」と坂東元くん（2-2）の「韋駄天伝説」が佳作に選ばれた。

黒島さんは現代社会の顔の見えない怖さや孤独感をデッサンを貼り付けるなどユニークな手法で表現した。

「孤独」　黒島那月

弓道三段の花立さん。もっと構図や色合いを考え、全道に出品したかったという。

「中らぬ的をねらって」
花立知世子

もっと描き込みをと坂東くん。来年に向け今年から描き始める。

「韋駄天伝説」
坂東　元

テニス佐藤由唯さん全日本で初戦突破

高体連支部大会では1年次より優勝を重ね、北海道ジュニア全日本予選ではシングルス3位、ダブルス3位と上位に名を連ねる佐藤由唯さん（2−2）。全日本で初戦を突破した。

右からコーチ、練習相手、佐藤由唯さん

全日本ジュニアテニス選手権
得意のサーブ

「全日本ではなかなか勝てなかったので一つ勝って自信につながった」という佐藤さん。プロのコーチがつき、ゲームの組み立てが上手くなった。得意はサーブと回り込みのフォアハンド。課題は精神面での安定をはかること。来年の全日本では2回戦突破を目標にしている。

テニスでは野村優斗くん（1−2）の活躍もめざましい。北海道ジュニア、オープンジュニア、ダンロップカップのいずれもダブルスで準優勝を重ねている。

あきた総文2026 新聞部門

7月28日から3日間、秋田県潟上市で総文祭新聞部門が開催され、落合優翔（3−2）、坂東元（2−2）が参加し、新聞作りを通して交流した。

大会マスコット「あきたぽ」

空港や秋田駅で秋田犬がお出迎え

交流新聞作りでアイデアもらう

落合　優翔

期間中、運営の方々が会場や最寄り駅の前で参加者一人一人に丁寧に挨拶や案内をされていて、この総文祭への思いが伝わってきました。

総文祭一日目は生徒交流会があり、全国各地から参加した班のメンバーと地元の話で盛り上がりました。また、交流会では秋田県や会場の潟上市にまつわるクイズが出題され、秋田県に関する知識がついただけでなく班員との親睦も深まりました。

二日目は交流新聞取材で、私の班は「八郎湖の水質改善に向けた取り組み」というテーマのもと、関係する博物館を取材し、秋田県立大学助教授の方の講話を聞き、実際八郎潟を見学しました。普段とは全く違う環境で、全国から集まったメンバーと取材をしたことは、今までとは違う貴重な経験となりました。取材後は交流新聞のレイアウトや記事の担当を決め、取材内容を振り返り記事の方向性を決めました。レイアウトでは今まで私の高校ではなかったアイデアが出され、全国のレベルに驚き、持ち帰って私の高校新聞に活かしたいと思いました。

班で新聞作り（右・落合くん）

最終日は各自が作成した記事を組み合わせ、交流新聞を完成させました。交流新聞をより良い形にするためにメンバー同士がアイデアを出し合い、今までの私には考えつかないアイデアが多く出され、最高の交流新聞を作成することができました。また他の班の新聞を見て、同じテーマであっても、方向性や切り口が異なり勉強になりました。

今回初めて総文祭に参加して、秋田という今までとは全く違う環境で、初対面のメンバーと新聞を作成するという、今までにない経験をすることができました。今回得た知識を活かして小樽双葉高校新聞部を盛り立て、翌年の石川総文で後輩たちが活躍出来るようにしていきたいと思います。

22班

秋田ねまりこ新聞

（ちょっと座って休んでこ〜）

八郎潟干拓の歴史をたどる

秋田県男鹿半島に位置する八郎潟は、かつて琵琶湖に次ぐ二番目の面積を有していたが、今は面積が五分の一になり、干拓されて水田が広がっている。この大きな変化をもたらした干拓について、大潟村干拓博物館で入植者の方にお話を伺った。

長野県から入植した石原敏子さんは干拓が行われた理由は主に四つあるという。一つ目は戦後の食糧不足により、米の生産量を増やすため。二つ目は農家の跡継ぎとなれない次男や三男などに農地を提供するため。三つ目は日本海からの水害を防ぐため。四つ目は戦後オランダから賠償金を請求された日本が代わりにオランダから技術提供を受け、その対価として技術費を払うためである。

技術提供を受け、干拓は一九五七年に開始され、二十年かけて約一万七千ヘクタールの農地が干拓された。国はこの土地をモデル農地として全国から入植者を募り、北は北海道から南は沖縄まで各地から入植者が集まった。

八郎湖の概要（美の国秋田ねっとより）

北海道から入植された松崎弘郁さんは、この仕組みについて「八郎潟の南北の排水機場では毎秒80トンの水をくみ出すことができる。また、高潮の津波などでか海水が流入すると、稲に悪影響を及ぼすため、防潮水門が設けられた。それによって汽水湖であった八郎湖が淡水湖に変わることができた」と語った。

環境を整え、未来へ繋ぐ

近藤正准教授（秋田県立大学）は八郎湖の水質を研究してきた。水量の変化、化学肥料の影響、アオコやシジミなど生態系の変化を調査し、農業を続けるためには水質改善が欠かせないという。

また、「八郎プロジェクト」は大潟村を中心に地域の魅力、歴史、自然環境について学び、地域活性化に繋げる活動だ。ＮＰＯ「はちプロジェクト」は「八郎潟モグリウム」（水草の水槽）を育て、観察し、将来は八郎潟に戻す活動をしている。（右はそのロゴ）（落合優翔）